

## 会議・視察報告

# モンゴルの経済特区—アルタンブラグとザミンウド再訪

ERINA 調査研究部主任研究員  
三村光弘

2017年9月にモンゴルの経済特区であるアルタンブラグとザミンウド両自由貿易地帯を再訪した。前回の訪問は2004年7月で、今回は13年ぶりの再訪となった（前回の訪問については『ERINA REPORT』vol. 62、48～51頁参照）。

達する広大な敷地を予定しているが、現状ではそのごく一部のみが供用されているにすぎない。ただし、インフラに関しては現状のインフラを利用しつつ、段階的に拡張が可能であるようだ。

自由地帯はロシアとの国境であるアルタンブラグ税関の施設に隣接しており、自由地帯を出ると、そのままロシアへつながる道路へと出ることができる。写真6は自由地帯からロシア国境を望んだものだが、中央の植

### アルタンブラグ自由地帯

モンゴルの北部、ロシアと国境を接するアルタンブラグ自由地帯には、2017年9月3日に訪問した。この地域でモンゴルとロシアとの交易が行われたのは古く、福建省武夷山からモスクワへと続く万里茶路のルートにあたる。ロシア側の街、キャフタは1727年のキャフタ条約が締結された街である。

前回の訪問時には、まだ自由地帯の区画が設定されたばかりの「建設予定地」であったが、2014年に政令153号で自由貿易地帯の設置が宣言され、運営が開始された。現在は主に、商業施設（免税店）が主であるが、自由地帯当局のホームページ（<http://altanbulag.gov.mn/>）によれば、2016年には国内から6万5651人、外国から746名の訪問者があったとされている。規模は大変小さいが、13年前には見渡す限りの草原や荒地であった場所に建物が建っているのを見て、自由地帯の建設がゆっくりではあるが進んでいることを確認できた。

現在営業しているのは、酒類を主に扱う免税店、食用油を主に扱う商店、服飾雑貨店などである。写真2、写真3は酒類を扱う免税店、写真4、写真5は食用油を扱う商店の様子で、非常に小規模であることが分かる。

自由地帯の開発計画は、図1のとおり、貿易関連の地区だけでも53.6ヘクタールに

写真1 アルタンブラグ自由地帯の商業施設（中央右）



（出所）筆者撮影

写真2 自由地帯内の免税店（外観）



（出所）筆者撮影

写真3 自由地帯内の免税店（内部）



（出所）筆者撮影

写真4 食用油を扱う商店（外観）



（出所）筆者撮影

写真5 食用油を扱う商店（内部）



（出所）筆者撮影

図1 アルタンブラグ自由地帯の開発計画



(出所) アルタンブラグ自由地帯ホームページ

写真6 アルタンブラグ自由地帯からロシア国境を望む



(出所) 筆者撮影

生のない部分が国境線で、ロシア側、モンゴル側双方に人の出入りを禁ずる緩衝地帯があり、自由地帯はその緩衝地帯に隣接して設置されていることが分かる。

### ザミンウド自由地帯

ザミンウド自由地帯は中国の内モンゴル自治区二連浩特市と向かい合うザミンウドの街と中国国境の間に位置する。地帯の南側の出口はすぐにモ中国境へと向かう道と合流する。こちらも一般の税関で通関することなく、中国へと直接つながる道があるのは、アルタンブラグと同じである。

ザミンウド自由地帯は、2004年にモンゴル国会で「ザミンウデ自由経済地帯の設立」に関しての議決がなされ、その面積を

900ヘクタールとすることが決定された。2011年6月22日に政令第187号「ザミンウデ

自由経済地帯のマスタープランを承認することについて」が発表され、900ヘクタールの土地を行政管理、住宅、工場・倉庫、観光、商業・ビジネスといった区域に区分し、事業環境を保障するためのインフラ環境を整えた地域にすることを目的している。

写真7は、2016年8月に撮影されたザミンウド自由地帯の衛星写真であるが、写真中央の自由地帯の敷地のうち、道路建設はほぼ終了し、写真よりもより整備された状態となっている。地帯当局のJ.ウンドラクバヤル氏によれば、電気と工業用水、暖房用の熱の供給はすでに行える状態である。すでに4ヘクタールの分譲が開始されており、建築材料工場や食肉加工場の建設が予定されているとのことであった。現在はモンゴル企業の投資中心であり、中国企業は観光業や工場に関心を持っているとのことだ。現在、二連浩特市からザミンウドの街への日帰り観光が行われており、バスで3〜4台、1日200人程度の観光客がザミンウドを訪れるそうだ。観光客が好むのは買い物で、ヨーロッパメーカーのインスタントコーヒーやクリームパウダー（実物を見せてもらったが、植物性脂肪のものであった）、牛肉、馬肉、ロシア製のコム（ボルガ川流域で生産されているジャポニカ米）などに人気があるとのことだった。

写真8は管理事務所に掲示されていた自由地帯の完成予想図であるが、写真7で2016年に道路がすでに完成しているのは、この予想図の中心付近となる。

両自由地帯とも、開発できるエリアは比較的大きいが、実際に開発されているのは

写真7 ザミンウド自由地帯の位置(中央、上はザミンウドの街、下は中国の二連浩特市)



(出所) GoogleEarth

写真8 ザミンウド自由地帯の完成予想図



(出所) 筆者撮影

その一部（100分の1程度）に過ぎない。モンゴルの自由地帯はロシアや中国との国境に設置されている（もう一カ所はモンゴル西部、ロシア・ある対共和国との国境に近い、バヤンウルギー県ツァガンノール）。

地方経済振興のためであるが、そのため首都であり、経済の中心であるウランバートルと離れており、税制優遇など、自由地帯の持つメリットよりもビジネスが難しいリスクの方が大きいのが現状である。また、アルタ

ンプラゲ自由地帯の場合、ロシア側のキャプタにも経済特区が構想されているが、こちらは観光がメインであり、物流中心のモンゴル側の構想とは差異がある。どちらも国の辺境に位置する特区であり、元々の条件が厳しいことから、無理をして開発するという感じでもない。

とはいえ、中国の一带一路構想やロシアのアジア・太平洋地域への関心の拡大など、この13年の間にこの2つの自由地帯を取り巻く環境は大きく変化していることも事実で、特に中国からモンゴルを經由しロシアに向かうルートのモンゴル側の両端にこの2つの自由地帯があることから、経済特区の海外への拡大を構想する中国側の投資を取り込むことができる可能性もあり、モンゴルの自由地帯の将来には困難も大きいと予想されるものの、引き続き動向を注視する必要があると感じた。